

平成30年度
ひらめき☆ときめきサイエンス～ようこそ大学の研究室へ～KAKENHI
(研究成果の社会還元・普及事業)
実施報告書

HT30202 心理学博士たちの1日 ～やる気を高める方法を開発せよ～



開催日: 平成30年8月4日(土)

実施機関: 同志社大学

(実施場所) (心理学部 香柏館)

実施代表者: 田中あゆみ

(所属・職名) (心理学部・教授)

受講生: 中学生10名、高校生12名

関連URL:

【実施内容】

■受講生に分かりやすく研究成果を伝えるために、また受講生に自ら活発な活動をさせるためにプログラムを留意、工夫した点

本プログラムは、受講生にグループプロジェクトとして実際に心理学の実験を自ら計画、実施し、結果をポスター発表してもらうことを通じて、サイエンスとしての心理学とは何かを実際に体験してもらえるよう工夫した。特に、グループ内の受講生どうして話し合いが円滑にすすむようにするためには、どのような人数が適切か、どのような年齢構成が適切か、またどのような働きかけをするべきかをグループプロジェクトを担当する実施協力者(大学院生・研究員)と事前に検討した上で当日にのぞんだ。当日は、まずグループでアイスブレイクの時間を設けてコミュニケーションをとりやすい状態になるようにした。実験で用いる課題は全て実施者側で設定し、受講生が「やる気を高める方法」を考えることに集中して議論できるようにした。ポスター発表についても、ポスターの雛形や、発表の担当時間を決めるためのシフト表を準備して、限られた時間内にスムーズにポスター作成や発表ができるよう留意した。

■当日のスケジュール

9:10～9:30

受付(集合場所:同志社大学京田辺キャンパス正門)

9:30～9:45

開校式(挨拶、オリエンテーション、科研費の説明)

9:45～10:00

1. 講義「やる気の心理学(講師:田中あゆみ)」

10:00～10:30

2. アイスブレイクと実験説明およびグループ分け(講師:石井僚)

10:30～10:40

休憩

10:40～12:15

3. グループプロジェクト①「やる気を高める方法を考えよう」

12:15～13:15

昼食

13:15～14:50

4. グループプロジェクト②「みんなの考えを実験で確かめてみよう」

14:50～15:20

5. グループプロジェクト③「実験結果をまとめよう」

15:20～15:40

休憩(クッキータイム)

15:40～16:10

6. グループプロジェクト④「実験結果を発表しよう」

16:10～16:20

7. 講義「やる気をめぐる心の仕組み(講師:田中あゆみ)」

16:20～16:30

閉校式(未来博士号授与、アンケート記入)

16:30

終了・解散

■実施の様子(図・写真を用いて記入ください)

1. 講義「やる気の心理学」 グループでやる気を高めるための実験を計画してもらう基礎知識として、やる気とは何か、やる気を高める方法としてこれまでにどのようなことが言われているかについて講義を行った。

2. アイスブレイクと実験説明 アイスブレイクでは、他己紹介を行った。ワークシートを準備して、紹介する内容が明確になるようにした。実験では、中国語の単語を記憶する課題を使用し、この時間にベースラインの測定を行った。

3. グループプロジェクト①「やる気を高める方法を考えよう」

どのような状況を設定すれば中国語の単語を覚えるためのやる気が高まるかについてグループで話し合い、実験をする方法を計画した。途中で実施協力者のミーティング時間を設けて、話し合いが進まないグループについては対処方法を検討した。

4. グループプロジェクト②「みんなの考えを実験で確かめてみよう」 ご褒美、競争、部屋の気温の操作、運動、目標の設定などの方法が考案された。実験は3セッション繰り返し、受講生自身が実験者および実験参加者の両方を体験できるようにした。また、同伴の父母にも実験に参加してもらい、各グループの実験参加者数が10名以上になるようにした。

5. グループプロジェクト③「実験結果をまとめよう」 事前に準備したポスター用紙に実験の仮説、方法、結果、考察を記入した。考察では、効果があったかどうか、実験の改善点と今後の課題について話し合いを行った。

6. グループプロジェクト④「実験結果を発表しよう」

ポスターに書かれた内容について、3分で発表、2分の質疑のセッションを4回行った。全ての受講生が発表を担当できるようにし、また、他のグループの発表も聞きに行けるようにした。

7. 講義「やる気をめぐる心の仕組み」

実験のまとめとして、それぞれのグループの結果をどう解釈するべきかについて、統計的検定の必要性を説明し、サイエンスとしての心理学とは何かについて解説を行った。



■事務局との協力体制

- ・委託費の管理は研究開発推進課長が予算管理責任者として執行管理を監督し、同課員が実際の管理業務を行った。
- ・日本学術振興会への連絡調整及び提出書類の確認等は研究開発推進課が行った。
- ・広報活動、受講生募集は、研究開発推進課が中心となり、広報課、入学課および実施代表者の所属学部事務室と連携して行った。

■広報体制

- ・法人内諸学校、近畿圏高等学校へ案内状を送付し、本プログラムをPRした。
- ・大学のHPに募集案内を掲載した。

■安全配慮

プログラム全体を通じて特殊な機具等は使用せず、参加者にかかる危険は少なかった。実験では3名～4名を1グループとして実施し、各グループに1名の実施協力者を配置し、全体に目が届くよう配慮をした。また、当日は受講生および実施者を対象にレクリエーション保険に加入し、不慮の事故等に備えた。当日の猛暑による熱中症対策として、適宜お茶や水などを受講生に配布した。

■今後の発展性、課題

本プログラムでは、心理学実験の一連のプロセスを実際に体験することで、受講生が自分たちの実施した方法の妥当性や、得られたデータの解釈に関して、適切な考察ができていることが、ポスター発表での質疑の様子からも推測された。最後の全体講義で、受講生の実感した実験の限界などについて発表してもらい、それをもとにした解説をすることができれば、さらにサイエンスに対する理解が深まり、興味を高めることができたと考えられる。

さらに本プログラムでは、実験において、中高生による実施や理解が比較的容易な記憶課題を用いたが、今後は生理指標を用いるなど、その他の研究手法を体験するプログラムに発展させることにより、異なる側面から心理学への興味関心を深めることができると考えられる。

【実施分担者】

石井 僚	免許資格課程センター	嘱託講師
森村 千恵	研究支援課	研究支援員
田村 紋女	研究開発推進機構	特別研究員

【実施協力者】 6名

【事務担当者】

飛野 達 研究開発推進課 係員